

貧困研究会 ニュースレター

2026年3月13日発行

No.3

【1. 貧困研究会第18回研究大会報告】

第18回貧困研究会研究大会は、2026年1月10日・11日の両日、大阪公立大学中百舌鳥キャンパスにおいて開催されました。本大会は対面形式で実施され、寒い時期での開催ではありましたが、129名が参加し、活発な議論が展開されました。大阪での開催は2009年の第2回大会以来2度目となります。なお、2022年に大阪府立大学と大阪市立大学が統合され、大阪公立大学が新たに開学しました。

共通論題は「若者の貧困—大都市と地方、制度と実践」でした。若者の貧困を、経済的困難にとどまらず、就学・就労の不安定さ、精神的健康の問題、社会的孤立、居住不安などが重層的に絡み合う複合的課題として捉え、制度と現場実践の両面から検討することを趣旨としました。近年、若者支援の不十分さが指摘されているにもかかわらず、本研究会の研究大会ではこれまで若者を正面から扱ったことがなかったことから、本テーマを設定したものです。当日のディスカッションでは、精神疾患や知的障害、依存症、児童養護施設退所後の孤立など、貧困リスクを高める多様な要因が提示され、制度のあり方と地域実践の課題が多角的に議論されました。

司会は楠木奈津子氏（上智大学）が務めました。登壇者と報告題目は以下のとおりです。大里祥氏（大阪公立大学大学院博士後期課程・自治体職員）「生活保護・生活困窮の行政現場における若者支援の実態」、石井まこと氏（大分大学経済学部）「地方圏の若者のライフコース選択からみる貧困と防貧のはざま」、今井紀明氏（認定NPO法人D×P）・柴田大樹氏（大阪公立大学都市経営研究センター・自治体職員）「今日的な社会課題に起因する、若者が抱える各種生活課題に対する支援の現状」、鈴木晶子氏（認定NPO法人フリースペースたまりば）「多様な困難を支える子ども・若者の居場所づくりと支援—地域だから暮らしまるごと」です。コメンテーターは阿部彩氏（東京都立大学）が務め、理論的観点からの整理と今後の研究課題が示されました。

2日目には、自由論題の分科会が4会場で開催されました。子どもの貧困、食の支援、貧困の測定、生活保護、居住支援、奨学金など、多岐にわたるテーマについて計21本が報告され、各会場で充実した議論が行われました。さらに、午後には釜ヶ崎スタディツアー（フィールドワーク）が実施され、15名が参加しました。

五石敬路（大阪公立大学）

◆今号の目次◆

1. 第18回研究大会報告
2. 出版部会報告
3. 新入会員ご紹介
4. 広報委員会より
5. 事務局より

◆貧困研究会事務局：〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池12

愛知学院大学総合政策学部 鈴木佳代研究室気付

Email:

admin@hinkonken.org

◆編集・発行

: 貧困研究会広報委員会 後藤広史・湯澤直美

【2. 出版部会報告】

2022年に出版企画が立ちあがった『貧困研究ハンドブック』『貧困研究ブックガイド』は、貧困研究会編として2025年12月に刊行されました。

貧困研究の蓄積を多くの方々と共有していくためにも、ぜひ広くご紹介ください。大学等の図書館や地域の図書館への購入リクエストもご検討いただけますと幸いです。



※執筆者のおひとりである堤圭史郎会員にご寄稿いただきました。

『貧困研究ブックガイド』という経験

堤 圭史郎 (福岡県立大学)

ブックガイドで私が担当したのはラウトリー『貧乏研究』と、上野英信『追われゆく坑夫たち』であった。執筆依頼を受けて以降、仕事の合間を縫っては、原著を読み、関連文献を読み、メモをとってきた。それそのものは面倒ながら、楽しい経験であった。特にラウトリー『貧乏研究』は教科書で知る以外には不案内だったこともあり、それだけには収まらない、本書の奥行きの高さを知ることができたことは、僥倖だとすら感じた。

他方で、このような作業を続ければ続けるほど、重要な論点が次から次へと現れる。あれも書きたい、これも書かないといけない。これを書き忘れては画竜点睛を欠く……。そうしてつくられたメモをもとに、いざ書き始める。たくさんメモをとったので、書くことには事欠かない。しかし、今度は執筆要領にある「35文字×30行×4頁以内」(約3,600字)という字数制限が立ちはだかるのである。どちらの原稿も、書き始めたらあっという間に10,000字くらいになってしまった。そのように編集委員の方に進捗を報告しようとも、所定の枚数に収めるようにと返信があるだけである。

ああ、もっと枚数が多ければ、もっと自由に書きたいことが書けるのに……。そんなことを思いながらも、清水幾太郎が「土俵が狭いから負けたので、土俵がもっと広ければ勝ったのだ、と言うのはナンセンスである」(清水 1957:10)と、短文を書くことの効用を説いていたのを思い出す。そもそも数百頁にも及ぶ書物を、これだけの枚数に収めるのである。私がやっているのは実のところ、あれだけ書いたメモのほとんどを捨て、捨てたものから再び拾い上げるというような作業をしているのだということに、気付かされるのである。そうする中で、意を決して泣く泣く捨てざるを得なかったものができるとともに、どうしても捨てられないものが残っていく。

しかし、そのどうしても捨てられないものの全てが原著に依拠しているのかといえば、そうではない。編集委員会からは「本書の概要」「本書の意義」「著者の略歴・関連文献・議論の広がり」の3節構成で書くように言われている。「本書の意義」として何を強調するのか、「関連文献」に何を取り上げるのか、「議論の広がり」はどのパラダイムとの関連に着目するのか。そこに私自身の取捨選択が働く。そうすると、それらで書く内容と相応に、「本書の概要」に書く(拾い上げる)ことも、取捨選択されることになる。

編集委員会からは「一般的な解説ではなく、貧困研究からみた解説を意識して」書くことを要請されているが、基本的には貧困研究をこれから学ぼうとするさまざまな立場の人々に参照される以上、その内容には原著の内容が正しく伝わる客観性が担保されていなければならない。しかし、この「4枚に収める」という作業は、そのように客観的な態度であることよりも先立って、原著と向き合った際の、私自身の主体性を意識せざるをえない体験だったと思うのである。

他方で浅学の私には、ラウンリーの業績に向き合えるだけの備えはなかった。実はラウンリー『貧乏研究』の依頼を受けた翌月に、『地域社会学会年報』編集委員会から、武田尚子先生の『市場都市イギリス・ヨークの近現代—市場再編と貧困地域』(東信堂。以下『市場都市』)の書評依頼が舞い込んできた。本書は『20世紀イギリスの都市労働者と生活—ラウンリーの貧困研究と調査の軌跡』(ミネルヴァ書房)の続編であり、500頁を超える浩瀚な書である。何が起きているのかと驚くばかりだった。しかし、『貧乏研究』の解説を書くことは「お前の仕事だ」と、天命が降ったような気持ちになった。書評の依頼も引き受けることにした。『貧乏研究』への心許ない旅に、この書評執筆はきわめて心強い経験になった。勉強の成果を十分に書き落とせたのかはともかく、『市場都市』が丹念に追うヨークのスラム改良とクリアランスの過程に、ラウンリーの調査が重要な意味をもったことにふれることができた。個人的には本書の肝心な部分が、第二次貧困という概念を設定したことにあると考えた。本書が教科書で「絶対的貧困」の項で知るだけではあまりにももったいない内容を含んでいることを、後世の方々にも知っていただきたい。

『追われゆく坑夫たち』の執筆依頼はだいぶ遅れてから届いたが、引き受ける際のプレッシャーはこちらの方が大きかった。長年筑豊に身を置きながら、上野英信ファンの方がたくさんいらっしゃることを、よく知っていたからである。本書においても「拾っては捨てて」を繰り返すことになる。改めて「しんどい」本であるとともに、それでいてどこかおもしろい。そのおもしろさも含め本書のインプリケーションは様々あり、既に各所でいろいろな方が議論している。しかし、私が特に強調したかったのは、坑夫たちが、働けば働くほどかえって貧困に陥る状況に置かれていることである。それは私が釜ヶ崎支援機構と大阪市立大学大学院創造都市研究科による、「ネットカフェ生活者調査」に参画した経験に根ざした選択であった(その成果は『[若年不安定就労・不安定住居者聞き取り調査報告書](#)』(2007年)に纏められている)。

本調査で出会った人々はいずれも、これでよく健康でいられると驚くほどの労働実態と生活状況だった。低賃金なのはもちろん、労働法がまともに守られていない、現場仕事であるにも関わらず現場までの交通費は自分持ち、勤めてすぐに平気で遠くへ異動させられる、アパートがあるのに早朝仕事に就くためにネットカフェに泊らざるをえない、労働災害に遭ってもハローワークも労基署もどこもまともに取り合ってくれない—心身がズタズタにならないわけがない。規制緩和による諸変化が、就職氷河期世代の非正規労働力となった人々を容赦なく蝕んでいた。私は『追われゆく坑夫たち』の登場人物たちを、「ネットカフェ生活者調査」で接した人々と重ねた(詳しくは、報告書所収の櫻田和也の論文を参照されたい)。

「働けば働くほどかえって貧困に陥る」—そんな労働を許してはならない。貧困は社会保障により解決すべきであることに間違いはない。しかし、貧困が日常の社会問題になった中で、労働問題はどこかで看

過されてはいないか。ブックガイドで「読者に争点の問い直しを迫る」と書いたのは、そうした考えを巡らせた結果であった。

このようにブックガイドを書くということは、単に本の紹介に止まらない、「精神の高度の緊張」（清水1957:11）のもと、何がしかを創造する経験だったように思う。私が創造した『貧乏研究』『追われゆく坑夫たち』の世界が如何程かは、後世の評価に委ねる他ない。しかし、ブックガイドが届いてから毎日何冊か紹介文を読み進め、楽しい本ができたと思改めて思った。それとともに、自分がその一角を占めていることを嬉しく感じた。お声がけいただいたことに深く感謝申し上げたい。そして、本書が後世まで読み継がれ活用されることを、切に願っている。

参考文献

清水幾太郎,1957,『論文の書き方』岩波書店。

【3. 新入会員のご紹介】

※2025年度に入会者のうち、4名のかたからお寄せいただきました。

◆中塚久美子会員：北海道大学大学院教育学院博士後期課程

専門：貧困、当事者の声

朝日新聞の記者として20年弱、貧困をめぐる問題取材しておりました。この間、貧困研究会会員の研究者の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。2026年3月末に退社し、4月から大阪電気通信大学の教員になります。未熟者ですが、引き続きよろしくお願いたします

◆岡本菜穂子会員：上智大学総合人間科学部看護学科

専門：公衆衛生看護、国際協力、健康

私はこれまで看護学の立場から、地域で暮らす人々の健康課題について携わってまいりました。日々の教育・研究活動の中で、健康状態と経済的・社会的背景の密接な関連を痛感し、貧困がもたらす「健康格差」や、支援からこぼれ落ちてしまう人々の健康維持のあり方について深く学びたいと考え、入会いたしました。

学際的及び支援現場での知見を含めて豊富な議論が行われる本会において、看護・医療の視点から少しでも貢献できればと考えております。諸先生方、皆様のご指導を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

◆鹿島謙輔会員：厚生労働大臣指定法人 いのち支える自殺対策推進センター／埼玉大学大学院博士後期課程

自殺対策に関わる調査法人において分析官として勤務しています。労働法制度と運用のデカップリングから貧困に陥る過程について関心を持ち、さらには自殺に繋がる懸念を抱いています（特に氷河期世代）。先生方の知見から学びを得たく入会させていただきました。何卒よろしくお願い申し上げます。

◆黒田華会員：琉球新報社

専門：食支援、企業連携、地方新聞社

沖縄の地方新聞社（琉球新報社）で主に子育て世帯や高齢者の貧困問題の取材を行い、現在は食支援等の事業企画運営をしています。こちらで学ばせていただきながら地方新聞社の役割を模索しています。

【4. 広報委員会より】

広報委員会では、会員のみなさんの新刊の書籍情報を共有する取り組みをしています。論文や報告書の情報もお寄せください。

随時、会員のメーリングリストで情報は提供してまいりますので、下記のグーグルフォームより、最近刊行したものや近刊など、お寄せください。お待ちしております。

<https://forms.gle/LZcJG3j5A3ApfLi19>



複数の紹介書籍がある場合には、1件ごとにご記入ください。

【5. 貧困研究会事務局より】

◆会員数について

2023年8月時点の会員は233名でしたが、2026年3月現在、264名に増えています。貧困研究会の更なる活性化のためにも、みなさまの身近な研究者のかたや大学院生に、ぜひ入会のお声かけをいただけますと幸いです。

専任職のない方（大学院生を含む）は「正会員B」となり、会費は5000円に減額されます。この対応は、会費規程第3条により、代表および副代表が協議のうえ決定しますので、入会申込時（または所属変更時）に事務局 admin@hinkonken.org までご一報ください。

◆会費の納入について

2025年度会費を納入いただいた皆様、誠に有難うございました。まだの方は、年度内納入にご協力くださいますよう、どうぞよろしくお願い致します。ご納入後、雑誌『貧困研究』の次号発送時に、2025年度の既刊2号を合わせてお送りします。

なお、雑誌発送準備の兼ね合いで、2026年度からは会費納入期限を5月末とさせていただきます。ご理解ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

◆事務局体制について

事務局長は鈴木佳代、事務局員は大山典宏・小関隆志・後藤広史・桜井啓太が担っています。